



《Heading West Latitude: 39.67 Longitude: 140.82》 2011

オーヴェールは、ゴッホが『鳥の群れ飛ぶ麦畑』を描いた土地ですが、私は初めてそこを訪れた時、その、麦畑の、明る過ぎて、広すぎて、遠くの穂も近くの穂も同じく見えすぎる（風景）の中で、気を失ってしまいました。日頃、社会生活の中で機能させているような、目と脳を含む、いつも（自分）の身体だと思っていたものを頼りに何かを把握しようということが無化され、方向感覚だとか、そういったものが、混乱もなく、面白いように消えて行くことを経験しました。全てのものの名前が無くなってしまう感じでした。明るさの中で、光に撃たれたのかもしれない。光を獲得し、生物が目を獲得し、現在に至るまでの、生物としての「類的体験」のような意識が生まれ、変わりに（自己）が喪失していく感覚でした。その後、自分は、東北の山々や樹海の中に同じ感触を覚え、繰り返し訪問しては作品にしようとした時期もありました。

ものを把握し、名指すという行為は、ヒトが生きるための知恵であり、文化が担ってきた役割でもあります。しかし、（名前を与えることで）、名指されたものとの関係を固定化してしまふと、名指されるものの姿への想像力を失ってしまいます。

名指される前の全てのものの姿というのは、結構怖いものだと思います。空に（ソラ）という名前がなければ、海に（ウミ）という名前が無ければ、わたしたちの身体をとりまく世界は、突然喪怖なるものへと立ち返っていきそうです。

ですから、名指されて、把握したつもりになっている世界の姿を、突き動かそうとしたり、宙づりにさせようとしたり、溶解させようとするので、名指される前の世界の姿を想うこと。―それも文化が担う大切な仕事だと思ふのです。